

増子 湧一
(ますこ ゆういち)

千葉工業大学
工学部
建築都市環境学科



道の駅はいかにその土地の地域性を出すかが重要になってくる。

しかし地域の特徴を表すのは特産品、食品だけにとどまり、建築そのものは地域の特徴を表しているものは少ない。その上、道の駅は美術館や図書館など意匠的な建築が進んでいるものに比較すると、今日まで機能を重視した道の駅は建築化が進まなかった。

そこで私は、建築化された道の駅を提案する。自然に囲まれた環境の中には、「ハコ」ではなく、「山」のような建築がふさわしいと考えた。そこで山の稜線を建築に取り込み、建築を通した山の景色でそこにしかない地域性を表現する。「山」はポリゴン分割され、それが壁や天井となり、建築が自然の風景に溶け込んでゆく。



講評

作者は外観意匠について多くを説明した。外観に地域性を表現したとのことであるから、形態の決定過程はたしかに重要だ。だがそれよりも、店舗空間に生産・製造の場面を導入し、その過程を可視化するというアイデアの方が、本提案の社会的意義としてはるかに大きい。店舗の地域性を決定する主要因は、その地の人々の営為であるからだ。したがって、人・車両・原材料・商品・貨幣・廃棄物などの「流れ」そのものを計画し、これらの動的特性を空間化し、提示することこそ肝要だったのではないと思われる。また、従来の「道の駅」の規模を超越しているこの大屋根に、構造的な裏付けの備わったディティール設計を施すことができれば、この建築物が過大な空間をもつ意味を与えることができたであろうし、かつ、自動車の動態に相応しいスケールと店内を歩行する人々のヒューマンスケールとを構造的リアリティによって結びつけることも可能となっただろう。そうなれば、前面道路と敷地との関係や、駐車スペースと建築物との関係についても、自動車動線や動的スケール感に即して計画できたはずだ。課題は残るが、本作の施設利用イメージは豊かで、さらなる可能性に満ちている。

(審査委員：矢野 裕之)

